

# 水産資源増殖機能調査

久米 弘人

## ◆背景・目的

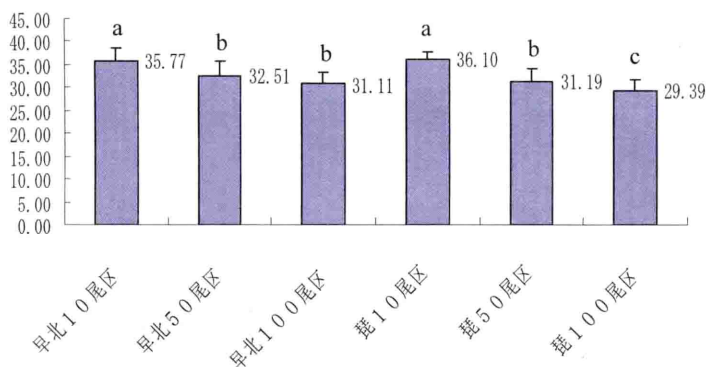
現在の早崎内湖は平成13年に湛水され、琵琶湖とつながりを持たない閉鎖水域である。今後、丁野木川を介して琵琶湖と接続予定であり、内湖再生が期待されている。接続前の早崎内湖の現状を把握するため、昨年度から環境調査、魚類相調査、ニゴロブナ標識放流調査などを実施している。

## ◆成果の内容・特徴

- ・早崎内湖北調査区では昨年度に引き続き、全窒素と全リンの値は高く、特に9月には全窒素で32.22mg/l、全リンで4.22mg/lと琵琶湖の水質基準値と比較しても非常に高い値を示した。
- ・早崎内湖北調査区でこれまでの調査を通して、初めてブルーギルが確認された。
- ・早崎内湖北調査区と琵琶湖岸調査区に生け簀を3張ずつ設置し、ニゴロブナ稚魚(平均体長23.1mm)を10尾、50尾、100尾收容し、1ヶ月間無給餌で飼育した。その結果、どの試験区でも生残率は89~100%で高かった。成長は両地点とも密度が高くなるにつれて、小さくなる傾向があった。密度あたりの生産力は早崎内湖北調査区のほうが琵琶湖岸調査区より高いと考えられた。(図1)
- ・早崎内湖北調査区に6月29日に放流したニゴロブナ稚魚(平均体長23.1mm)は翌年2月23日には平均体長が59.4mmまで成長した。(図2)

## ◆成果の活用・留意点

- ・ 今後、琵琶湖と接続により、早崎内湖の環境や魚類相および生産力の変化についての検討を行う。



Scheffe's test P<0.05

図1. ニゴロブナ生け簀飼育試験結果

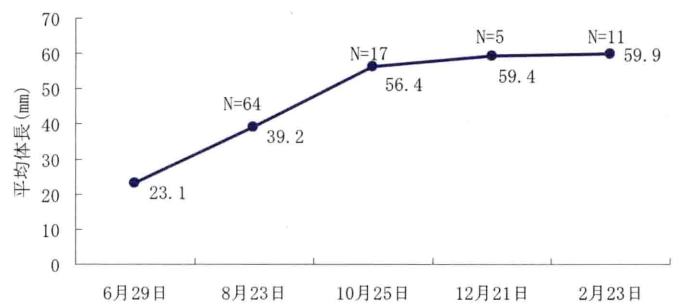


図2. 標識放流魚の成長の推移